

# 大字仮名作品における「割り書き」の展開

石丸 真 弥  
ISHIMARU Shinya

本作は、大字仮名に「割り書き」を取り入れて制作した作品である。

書くもの<sup>(1)</sup>  
の二つに分類することができる。

昨年、『大東書道研究』第三十号において、『元永本古今和歌集』における割り書きについての「考察」を執筆した。その際に、割り書きを取り入れた大字仮名作品（半切）を試作したため、以後、割り書きを取り入れた大字仮名作品を制作することが多くなった。ここでは、読売書法展で発表した作品とこの制作論のために書いた新作について論じていきたい。

【上册】  
巻第一

いろもかもおなじむかしにさくらめどとししふる人ぞあらたまりける…①

57

【下册】  
巻第十一

かざり火にあらぬものからなぞも

かくなみだのかはにうきてもゆ…②

529

大別すると、

- ① 歌一首一行書きの途中や末尾に二行で小さく書くもの（五首）
- ② 歌一首二行書きで二行目の末尾もしくは末尾直前に二行で小さく

この特殊な割り書きは、同筆である「卷子本古今和歌集」、「筋切・通切」でも使用されており、富岡美術館蔵の「卷子本古今和歌

集」断簡には、

巻第十九

人こふることをおもにとおもひても  
あはこなきこそ

わびしかりれけ…◎

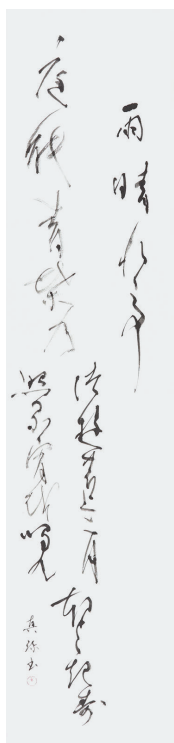
1058

のように、◎と◎を組み合わせたような◎の割り書きも見ることが  
できる。

『大東書道研究』第三十号においては、◎の割り書き作品を制作  
したので、今回は、◎の割り書きを基本とし、制作することにした。

一作目は、第三十九回読売書法展に出品した作品である。現存す  
る割り書きは、藤原定実筆の「元永本古今和歌集」二「卷子本古今和  
歌集」・「筋切・通切」に見られるように、書写内容は『古今和歌  
集』であることが分かる。そのため、あえて割り書きのない、近代  
歌人の歌で制作することにした。私は愛媛県の松山出身なので、正  
岡子規やアララギ派の短歌・俳句を書くことが多い。今回は、伊藤  
左千夫の歌一首を選んだ。この歌は、明治三十三年、正岡子規が主  
宰する歌会「報東東幾数（ほととぎす）の巻抄」に出詠された歌で、  
曾我蕭白の研究の嚆矢である桃澤茂春（如水）が幹事を務めた際に

寄せられたものであり、その詠草集が桃澤家に現存している。東京  
文化財研究所に勤務していた頃、偶然同僚に桃澤茂春の子孫の方が  
いたこともあり、桃澤茂春が前述の幹事を務めた際に詠んだ歌を書  
いて発表したこともある。①そのような経緯もあり、この歌を書くこ  
とにした。紙は公募展のため、二尺×八尺の素紙を使用した。なる  
べく漢字表記の部分はそのまま活かしつつ、二行で小さく書く部分  
を定めていった。「ほととぎす」を「報東東幾数」にするなど色々  
試したが、最終的には、一行目を短くして余白を作り、その余白に  
あわせて、「露の上に月照る宵を鳴く」を二行にし、割り書き部分  
が分かりやすく、変化に富むようにした。全体的に草仮名を多く使  
用し、古筆には無いタイプの割り書き作品を試みた。



雨晴れて  
庭の青葉の露の上に月照る宵を鳴くほととぎす

【出典】

『伊藤左千夫全短歌』伊藤左千夫 岩波書店

二二五×五三 cm

二作目は、一作目よりも古筆に忠実な⑧の割り書きを目指すことにした。そのため、『大東書道研究』第三十号の作品と同様に半切を使用した。選歌においては、一作目と同じくアララギ派の長塚節の歌一首を選んだ。この歌は、大東文化大学で教授を務められた今関脩竹先生が、昭和六十三年の日展で大字仮名作品として発表しており、いつかは書いてみたいという憧れから、この歌を書くことにした。「馬追蟲（うまおひ）・「髭」は、この作品の見せ場となる部分なので漢字表記のまま書き、二行目の末尾を二行で小さく書くことにより行を短縮できるので、「秋は」を二行目の頭に持つてくることにした。末尾は「みるべし」なので、「みるべ」を三字連綿にし、「し」と隣り合わせることで、作品下部がすっきり見えるようにした。割り書きの淡墨作品は見たことがないので、斬新さを求めて淡墨を使用した。

④の割り書きに比べ、⑧の割り書きは一行多いため、紙面が狭く見えてしまうが、二行で小さく書く部分を何文字にし、どこに配置するか、いかに縦の流れを出すかが、狭く感じさせないポイントとなった。割り書きをすることにより、行を短縮できる点は、④・⑧ともに共通する利点であり、色々な展開が期待できる。

二〇二三年度、大東文化大学は創立百周年を迎え、来年度は、書道学科創立二十五周年を迎える。創立からの軸である書学と書作の

両立は容易ではないが、今後も書学に根差した作品制作に取り組みよう精進していきたい。

#### 【注】

(1) 『飯島春敬全集』第七卷平安五では、④のみを割字書として記載し、⑧については一つも記載されていない。春名好重氏の『古筆大辞典』・『古筆辞典』・『古筆の鑑賞』も同様。

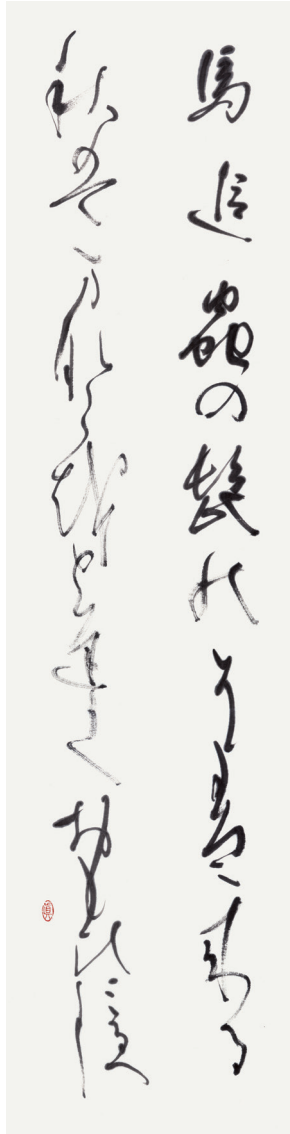
(2) 新聞『日本』明治三十三年七月に発表。「出詠者、選者いずれも十四人、十四首宛を選みて秀真高点なり。」とあり、左千夫の歌は六点中、三点の評価となっている。子規庵で最初の歌会が開催されたのは、明治三十一年三月二十五日。歌会の記事は「短歌小会」（明治三十二年七月二日）以後、新聞『日本』に発表され、「十月短歌会」までは子規庵で開かれた。「報東東幾数（ほととぎす）の巻抄」は郵便歌会で、兼題である「時鳥」について会員が幹事宛てに出詠し、幹事は詠草集を作成して会員に回覧、互選して集計後一位の人がその詠草集を貰えるという仕組み。桃澤茂春による明治三十三年の日記『庚子目録』によれば、六月八日に「左千夫、秀真両君に時鳥の催促の端書を送る。」、翌九日には「左千夫君より時鳥の歌来り、秀真君より端書来る。」とあり、茂春が幹事を

務めた際の様子を垣間見ることができる。

筥会書作展（二〇一二年）に色紙の作品として出品した。

- (3) 一八七三年（明治六年）～一九〇六年（明治三十九年）。本名は重治（しげはる）。雅号は如水（によすい）・桃画史〔画名〕、茂春（もしゅん）〔歌名〕、三六〔筆名〕、子脩、仙果などがある。長野県上伊那郡飯島町本郷出身。橋本雅邦門下の日本画家でありながら、正岡子規直門の歌人。先祖には二条派宗匠のちに桂園派の桃澤夢宅がおり、茂春はその五世の孫にあたる。明治三十六年に病氣回復のため伊勢に渡り、それ以降、伊勢における曾我蕭白の逸事を蒐集する。明治三十九年、日本美術院『日本美術』八十五号・八十六号・八十八号の三回にわたって、三六の筆名で『曾我蕭白』を連載。近年、曾我蕭白の人气が高まり、関連する展覧会が多く開催されたこともあって、曾我蕭白研究の祖述家として再評価されている。また、新聞『日本』の篆刻募集に六回入選し、『日本印譜』には、「碧梧翠竹」・「雲破月来池」の印譜が収録されており、河合筥廬・五世濱村蔵六の批評が記されている。茂春に関することについては、『正岡子規直門桃澤茂春実暦』（橋本俊明著・いりの舎）が詳しい。

- (4) 「朝雨はゆふべに霽れて篁の濡れ葉の月に鳴く時鳥」この茂春の歌は、六点中、四点の評価となっている。第四十九回藍



135×35cm

馬追蟲の髭のそよろに來る  
秋はまなこを閉ぢて想ひしみるべ

【出典】

『長塚節歌集』 斎藤茂吉選 岩波文庫